



これが世界も期待した トップなのか 裸の王様か、募る失望感 農業大国の夢遥か

インド・ビジネス・センター代表 島田 卓

成功した農業改革州の人々にさえ催涙弾 農民の声をなぜ無視する？

インドといえば、その暑さ。だが12月から年明けの1月にかけての首都ニューデリーは摂氏5度前後にもなり肌寒くなる。石造りの家が多いため、家を温めるにも一苦勞だ。門番は、毛布もどきを体中に巻き付け、目出し帽をかぶり、盗賊さながら。落ち葉や枯れ木を焚いて暖を取るから、大気汚染も酷くなる。

2020年11月下旬、ニューデリーまで100キロ以上の道のりを、1週間以上もの食料や燃料を積み込んだトラックやトラクターに乗った人々がいた。「インクイラブ・ジンダバッド（“革命万歳”）」と叫び、こぶしを振り上げながら結集した。

彼らは自らの力で農業を変えてきたハリヤナ州やパンジャブ州の農民たちだ。9月に与党インド人民党（BJP）が「農業改革のための」として国会で一方的に可決した農業関連新法に決死の覚悟で反対姿勢を示し、新法の撤回を要求している。

数千人規模に膨れ上がったデモ隊は州境の道路を封鎖し、モディ首相の辞任、BJP下野さえ要求している。政府は、こん棒、催涙ガス弾や放水砲で対抗しているが、その勢いを

止めることができていない。また、政府は農民代表との団交を試みているが、今まで5回の交渉はすべて物別れ、12月9日に予定された団交も延期された。その間、州境でストを続ける農民を見舞った野党（AAP:庶民党）党首かつデリー準州首相のアーム・アダムイ・パーティが帰宅後自宅軟禁された。

しかし、農民たちの決意は揺るがない。なぜ農民は何故そこまで抵抗するのか。

インドの従来の法律では「農産物生産コストと価格委員会（CACP: Commission for Agricultural Costs and Prices）」が22の農産物に関する最低保証価格（MSP: Minimum Support Prices）を決定し、それをベースに国営食料公社（FCI: the Food Corporation of India）が買い上げ、貧困層には補助金を付けて価格を引き下げたうえ販売する等、社会主義的統制農業制度が運用されてきた。

農民はCACPの最低価格保証を頼みに収穫量の計画を立て、燃料や肥料、農薬を購入する。一時的に家計がひっ迫し資金が必要になった場合、農家とFCIの間を取り持つ仲買人から金を借り、凌いできた。

だが、それは財政赤字の元凶にもなってきた。今回の法改正では、こういった中間業者も排除されることになった。

政府は、自由競争の下で中間搾取なしに自らの力で直接価格交渉ができるし、直接投資で生産拡大にもつながり、農家にとって収入増が図れると主張する。しかし、就労人口の過半を占める農家の大半は保有農地数千坪足らずの零細農家で、価格交渉力もなければ資金力もないのが現実だ。カネに物言わせ交渉してくる大手財閥系小売部門などには手もなくひねられる。最後は土地を手放すか、自死するしかない。

悲惨な状況に陥ったインドのコロナ禍。職に就けない実家が農業を営む26歳の大卒の若者は「癒しの一言が必要な時に、モディは国民を引き裂き、多くの問題含みの法律を通した。受け入れ難いし、立憲主義を踏みにじるものだ」と憤る。

農業で食う手もあるのに 日本のようにならないで

社会システムの矛盾を的確に把握し、その改善を図るのが政治家だ。就労人口の過半を占める農業のGDPへの寄与率が15%程度というのは、いかにも生産性が低い、改革が必要なことは自明だ。

ただ、一足飛びに最終着地点を示し、自助でそこまで行くのが農民の義務というのは暴論以外の何物でもない。

インドの農業改革に参考になるような事例は結構ある。ネスレの「モガ・プロジェクト」もその1つだ。ネスレはインドの企業だと思いつく人が多いようにネスレはインドに根付いている。1960年代からパンジャブ州内の、関東全域ほどの広さがあるモガ地区でミルクの調達を開始。価格の根拠を明示し、生産性や品質の向上に力を貸すと共に、地域社会への貢献も行った。

例えば、乳牛の健康管理を教育や、品質維持のための冷蔵タンクの設置、不安定な電力補強のためのソーラーパネルと家畜の糞を電

力に変えるバイオ装置の導入、人工受精技術の指導などを行った。また、100カ所以上の村の学校に井戸を掘り水の大切さを子供に教え、清潔なトイレも作った。

その結果、モガ地区はネスレが世界最大の調達を誇るミルク現場になり、酪農業が繁栄している。ネスレの幹部は「チャリティーではない。その全てが酪農家との信頼関係を強め、ネスレが利益を上げ続けられる基盤となっている」と言う。

このプロジェクトをつぶさに観察した競争戦略・企業戦略論の泰斗であるマイケル・ポーターは、「CSVモガにおけるネスレのインパクト（2014年Springer）」に序を寄せて、後にポーターの代名詞となるCSV（Creating Shared Value:共通価値の創造）という言葉に言及している。まさにSDGs（持続的発展）のためにはCSR（企業の社会的責任）からCSVへの転換が必要であることを示した。

そもそも、2019年に予想を覆すほどの圧勝で再選を果たしたモディは、公約で22年までに農家の収入を倍増させるとぶち上げたが、具体的政策はないに等しい。

選挙で勝ち続けるモディに対し、真っ向から反対意見や箴言を発する人はもはやいなくなっている。メディアさえもだ。自分が理想とする森の形を求めて闇雲に木を伐採していく。その結果、整った森は表れず、その中に生息していた動物は野垂れ死し、植物が枯れていき、森は空洞化する。そうなったときの責任はだれに帰すのか。インドには、シバ（破壊）、ブラフマン（創造）とヴィシュヌ（維持）の3大神がいる。新時代を形成するための破壊は必要だが、その結果が創造と維持につながらなければ、単なる壊し屋に終わる。でも考えてみれば、ましてや、インドは人口の半数を占める農家を、なぜ、農業大国の礎にしないのか。ビジネスマン出身のモディにはもう理解できないかもしれない。（敬称略）